

論文

ヴィクトール・フランクルの 態度・存続・時間について

佐川 和茂

キーワード

態度
存続
時間
精神分析
強制収容所
生産性

目次

はじめに
1 存続を求めて
2 ログ・セラピー
3 フランクルの態度
4 時間について
5 結論

はじめに

ヴィクトール・フランクルは、第二次大戦中、ヒトラーの強制収容所を生き延び、その体験を『夜と霧』(*Man's Search for Meaning*)を初めとした著作に著し、さらに精神分析の分野においても偉大な貢献を果たした。ホロコースト生存者の中には、肉体的・精神的に疲弊してしまった人々も存在したといっばうで、フランクルが甚大な悲劇のトラウマを乗り越え、ホロコースト以後の第二の人生を豊かに開花させた事実は、われわれに大きな感銘を与えるものである。と同時に、彼は、『夜と霧』を初めとした読者に対して、人生に付き物である悲劇や病気や不幸にいかに対処すべきかを身をもって示し、われわれに存続への勇気や気力を与えてくれるのである。

ホロコースト以後、「虚無の時代」に生きる意味を探求した精神科医フランクルと、たとえば、ヒトラーのような全体主義に抵抗するために自律した組織や個人の営みを目指す経営学を構築したピーター・ドラッカーや、哲学の研究と国際的な慈善活動に打ち込んだ投機家ジョージ・ソロスとを比較してみよう。彼らに共通した行動は、ホロコースト以後に積極的な人生構築を探求したことであった。それは、ホロコースト以後、「世界修復」のテーマを追求するソール・ベロー（『サムラー氏の惑星』*Mr. Sammler's Planet*）、バーナード・マラマッド（『修理屋』*The Fixer*）、アイザック・バシエヴィス・シンガー（『メシュガー』*Meshugah*）、エリ・ヴィーゼル（『忘却』*The Forgotten*）を含めたユダヤ系作家たちの動きとも連動し、さらに、それはそのまま、意識するとしないとに関わらずホロコースト以後を生きるわれわれの態度とも結ばれてくるものである。

本稿では、ホロコースト生存者ヴィクトール・フランクルの著作やその関連文献を通して、彼やわれわれの生涯にかかわる態度・存続・時間の問題を検討してゆきたい。

1 存続を求めて

まず、感動的な『夜と霧』において、フランクルはアウシュヴィッツ、ダッハウなどの強制収容所を生き延びた体験を綴っているが、そこで彼のホロコーストよりの生還を助けた要因は何であったのだろうか。

まず、当然のことながら、収容所の抑留者の間では激しい生存競争が繰り広げられた。それは、ガス室に送られる割り当て人数を決定する寸前にも同様であった。厳しい生存競争においては、道徳や倫理が省みられることはなかったという。その結果、奇跡や幸運などの要因で生還した者もいたであろうが、「最良の人々は収容所より生還することはなかった」(7)とフランクルは述懐している。

しかし、同時に彼は、いかなる状況でも人は自らの態度を最終的に決定する自由が残されているのだ、と繰り返し説く。これは、『意味への意思』(*The Will to Meaning*)においても強調されていることである。「避けがたい苦難など、人生の悲劇的・否定的な局面でさえ、人生の達成に変えることができよう。それは不遇に対して人がいかなる態度を取るかによるのである」(ix)と。難病など、定まった変えることのできないように思える運命に対して、たとえば、ヨブ記の主人公のような場合に、人はいかなる態度を取り得るのであろうか。順境も逆境も神がくだされたものとして受け入れるのか、それともそれに対して挑戦的な態度を取るのか。

フランクは、『夜と霧』において強制収容所の抑留者が示す反応を三段階に分けている。すなわち、その第一段階として、人はわが身を守るために、収容所の恐るべき状況に対して「無関心の壁」を構築するという。そして、第二段階に入ると、抑留者はさらなる無関心、つまり精神的な死に至るという。たとえば、同僚の処罰を目撃しても、目をそむけることができなくなり、また、苦難や死は、収容所では日常茶飯事であるので、それに無感動に陥る。収容所にチフスが蔓延し、その患者が次々と犠牲になろうとも、それに無関心になることによって周囲の悲惨より身を守ろうとするのである。さらに、万が一にも収容所から解放された第三段階の心理によれば、自由という意味が飲み込めず、解放されたことが信じられず、そこで喜びをじっくりと学び直してゆかねばならない。つまり、じっくりと「人間に戻ってゆく」過程を踏まねばならないのである。解放後に、再会を待ち焦がれていた人がもはやこの世に存在しないという悲劇を含めて生存者を次々と失望が襲うが、これまで筆舌に尽くせない苦難に耐えてきたのであるから、今ではもはや「神以外に恐れるものはない」(148)という心境に至る。

それでは、これらの3段階を通して、フランクの存続に寄与したと思える彼の態度を『夜と霧』の中で確認してゆきたい。

まず、チフスの蔓延する混沌とした状況下で、フランクはアウシュヴィッツで奪われたライフワークの再構築を試みる。確かに、倫理無き生存競争の中で、「最良の人々は生還しなかった」ことであろう。フランクが存続できたのは、いくつかの幸運や偶然が重なった結果であったかもしれない。しかし、彼がチフスの高熱に冒された状態においてさえライフワークである原稿の再構築に取り組んだこと、これはきわめて重要なことである。この態度があったればこそ、ホロコーストより生還した後の第二の人生において、ロゴ・セラピーの精神分析を広め、大きな成果を挙げることが可能となったのである。

次に、フランクを含めてたとえ華奢な体格の人であっても知性の豊かな抑留者は、しばしば優れた体格の人よりも収容所を良く生き延びる、ということが判明している。それは、恐るべき外的状況より豊かな内面世界に救いを求めることが出来るためである。歴史を辿っても、ユダヤ人はしばしば迫害による恐るべき外的状況の中で、聖書やその注解タルムードの豊かな世界に救いを求めてきた。それは、空虚な現実から豊かな内面へと至る動きであった。翻って、豊かな内面を構築することが、フランクにせよ、ドラッカーにせよ、ソロスにせよ、彼らの存続を助け、生涯教育の達成に貢献したことを忘れてはいけない。

反対に、自己の道徳的・精神的な支えを失くした人は、収容所の悪影響に染まっていった。さらに、未来や目標を失った人は回顧的になり、未来への信頼を失った抑留者は、精神の支えを失って、崩壊してしまったのである。たとえば、夢によって3月末に解放されると信じた抑留者が、その日になっても解放に至らないと分かったとき、気力も体力も失せて死んでしまう。勇気や希望という精神状態と、身体の免疫の抵抗状態との関係を考慮すると、突然の勇気や希望の喪失は人体に著しい悪影響を及ぼすのである。

収容所における精神生活は、食事の欲求で縛られている。非体験者には、飢餓がもたらす精神的な

影響は到底理解しがたいであろう。実際、厳冬で重労働をするのにわずかなカロリー摂取では、身体の筋肉が蝕まれてゆく。しかし、抑留者の間で食事の話の詳細にすることは、つかの間の慰みを得られても、むしろ身体にとって危険であった。そこで、わずかな配給食糧をすぐに食べてしまって最悪の空腹感を一時的にも満たし、食料の盗難や紛失の恐れを回避するのか、それとも、わずかな食糧配給を分けて用いるのか。フランクルは後者に属する。恐るべき収容所の現実に戻る目覚めの時間に残したわずかのパンを味わい、新たな重労働の一日に向かうのである。いっぽう、生きる意思を失った抑留者は、収容所の土木工事で得たクーポンでタバコを得て、それをさらにスープに換えることができるのに、生命が尽きようとする最後の日にタバコを吸ってしまう。

極限状況においては、ささやかなことでも大きな喜びとなりうる。たとえば、ダッハウにつらなる次の収容所には「ガス室がない」と分かったとき、抑留者は歓声を上げる。収容所間の長時間に及ぶ移動の後で、さらに懲罰に一晚外に立たされる事態が生じて、ガス室がないという喜びによって、それにも耐えようとするのである。また、チフスにかかり、厳冬の中で労働するのではなく、病棟でまどろんでいられることを幸せと思う。さらに、労働者としてもうすぐ生命が絶たれようとするところを、危険と死に満ちたチフス病棟の医師になることを志願し、そこでようやく一人でいられるわずかな時間を見出すのである。

いっぽう、ホロコーストにおいてもユーモアが存在しえたことが知られている（『地獄での笑い』 *Laughter in Hell*）。ユーモアは、自己を存続させる武器である。逆境に直面してもそれに対する自己の態度を決定する際、ユーモアが行動の余裕を与えてくれる。ユーモアは、自己を現実よりつかの間でも解放し、自己と苦難の間に距離をもうけ、問題を客観視できるようにする。そうした距離をもうけることによって、問題を扱いやすくするのである。フランクルは、強制収容所において、友人と互いに毎日一つずつユーモアを話すよう努めたという。

収容所では、あらゆる存続の可能性を活用しなければならない。フランクルは、そこにおいて、「労働に適した外見を維持せよ」（29）と、古株より注意を受けている。恐るべき寒さの中の長い行進においても愛する者の面影によってつかの間でも救われる。また、できるだけ群れの中央にいて、殴打や寒さから身を守ろうとする。さらに、無意味と思われる苦難より大きな意味を汲み取ろうとする。生きることは苦難を受けることであり、存続することは苦難のなかに意味を見出すことである。生きる意義が分かれば、苦難にも耐えられよう。

2 ログ・セラピー

フランクルの精神分析は、「ログ・セラピー」と呼ばれている。ログはギリシア語で、「意味」を表すという（153）。ログ・セラピーによれば、人は、アドラーやニーチェが説く「権力」や、あるいはフロイトが語る「娯楽」を求めるよりはむしろ、人生において生きる意味を求めるのであるという（154）。人は求めるべき独自の意味に目覚めたならば、それはその魂を強化し、病んだ精神にさえ治療をもたらすのである。すなわち、ノイローゼの悪循環を断つものは、自己の独特の仕事や人生のミッションに立ち返ることである。したがって、ログ・セラピーの人生へのアプローチは、楽観的である。

なぜならば、たとえ変えることの不可能な不運に見舞われたとしても、それに対する人の態度いかんによって、マイナス状況をさえプラスに転化できる、と説いているからである。ホロコーストというこの世の地獄をくぐった فرانクルがこのように人に対する積極的な信頼を失っていない事実は、驚くべきことである。

ドイツ語では20巻にもなるというロゴ・セラピーの内容が、『夜と霧』では簡潔に述べられている。人は人生に意味を探求する、そしてその意味の充足に責任を持つ存在なのであるという。人はそれぞれ個性を与えられ、他者によっては繰返されることのない独特の人生を歩む。各人は、宇宙の無限の中に生を受けた貴重な存在として、独自の意味を見出すことを求められているのである。

いっぽう、患者が自らの存在に意味や責任を感じないことが、病の要因である。同様に、欲求不満は、人生に意味を感じられない状態より生じているのである。そこで、強制収容所での想像を絶する非人間化の企てに対して、フランクルはロゴ・セラピーを通じて精神分析学の「人間化」を図る。ロゴ・セラピーのミッションは、フランクル自身の強制収容所体験より、すなわち、生きる意味を見出すことを拒否するこの世の地獄より生まれてきたものである。

自己の存在に対して具体的な意味が分かれば、人はいかなる状況にも耐えられるという。ロゴ・セラピーは、患者を精神的に目覚めさせ、人生の意味や価値を探らせる。患者が人生の課題から逃れようとする態度を修正し、人生の意味に気づかせようとする。自分にはまだ果たすべき仕事が残っている、と思うことは、病んだ精神を治癒に導き、人の存続につながるのである。ロゴ・セラピーは、患者の自殺を回避させる要素を紡ぎながら、それを強固な意味や責任の感覚へと縫い上げてゆくのである。

そこで人は人生の意味を充足させながら、自己を超越してゆく(175)。物事を実践することによって、愛を通して価値を体験することによって、あるいは、苦難を受けることによって意味を充足できよう。勇気を持って避けがたい苦難を受け入れることで、人生の意味は最後まで存在する。人生の問題に積極的に向かう人は、日々の行動を記録しながら、達成を蓄積してゆく。人は、生物学的、心理学的、社会学的な条件に対して、また遺伝や環境の産物に対して、自己の態度を決定し、自己を超越してゆくのである。

3 フランクルの態度

前述したように、フランクルは、アウシュヴィッツに到着した時点で、ライフワークをまとめた原稿を奪われてしまったという。そのとき彼はどんな気持ちがあったであろうか。これは想像に難くない。それでも彼は執筆をあきらめることなく、収容所でチフスにかかり、高熱を出して収容所の粗末な病棟で横たわっていたときでさえ、記憶を辿ってライフワークの内容を紙切れにメモしたという。その光景を想像してみるに、それはいかに精神的に高い緊張感であったことだろうか。また、それはいかに強靱な精神力であったことだろうか。そして、そのような極限状況においても維持し続けた学問への熱情であったことだろうか。こうした光景を描写するおそらく一番重要な言葉は、自分の状況をいかに捉えるかという彼の「態度」であったことだろう。

態度という言葉を考えてとき、ノーベル文学賞を受賞したアイザック・バシェヴィス・シンガーが『メシュガー』(Meshugah)の中で描いている状況が連想されよう。その語り手は、イディッシュ語新聞『フォワード』に小説を連載していたが、決して毎週の締め切りに遅れることはなく、たとえ流行性感冒で高熱に苦しめられていたときでさえ、締め切りを守ったという。いかにしてこれは可能になったのであろうか。おそらくフランクルと同様、彼の思想に核があること、豊かな物語性を蓄えていること、自らが書く内容に熱情を抱いていること、がその要因であろう。

さらに、このことはユダヤ系経営学者ピーター・ドラッカーにも当てはまるであろう。彼は生涯にわたって34冊の著作を発表したが、その中の22冊は還暦を迎えた後で執筆されたという。いっぽう、フランクルは、ホロコーストを生き延びた後で、ロゴ・セラピーに関するドイツ語の著作20冊を含めて『夜と霧』『意味への意思』『死と愛』などの感動的な著作を世に出した。フランクル、シンガー、ドラッカーの中に共通する要素を「素晴らしい」と称えて終わるのではなく、われわれの日常生活にその一部でも組み入れてゆきたいものである。

さらに、われわれは、フランクルの態度によって人生の喜びというものを考えさせられる。たとえば、フランクルたちがアウシュヴィッツより次の収容所に向かって家畜用貨車の中に詰め込まれていたとき、向かう収容所には「ガス室がない」と分かって、一行は大いに喜び、歓声を上げたという。また、別の例であるが、厳冬のなかで凍えながら強制労働に従事していたとき、日没がこの世のものとも思えない美しさに感じられたという。極限状況とふとした幸福との間の大きな隔たりが、フランクルにこのように感じさせたのであろうか。

これを読んで、ふと中野孝次の著作より知りえた良寛の人生を連想してしまう。良寛は、越後の厳しい冬の生活に五合庵で耐えながら、春の訪れに大なる喜びを感じたという。それは彼の歌「子供らと手まりつきつつ」にも良く表われていよう。良寛は、物質的には貧しく、ゼロかマイナスのぎりぎりの生活を送っていた故に、ふとした幸福に対しても大きな喜びを感じることができたのだ。常にゼロかマイナスの状況で生きている人にとって、少しのことで大きな喜びにつながるのである。

これは、ぬるま湯につかっているような、半分眠っているような人生においては、なかなか感じることの出来ない、また、表現することの出来ない感情であろう。

4 時間について

フランクルの著作は、囚人の生活の心理を解明することにも貢献するであろう。それは、ソルジェニツィンが描いた『イワン・デニソビッチの一日』、加賀乙彦の『ある死刑囚との対話』、ヘルマン・ヘッセの『魔の山』の患者、神谷美恵子の『生きがいについて』のらい病患者の場合にも当てはまるであろう。そのような場合では、終わりが予測できず、未来が見えない。

難病などで余命が限られていると思えば、優先事項を意識し、限られた「時間の質」を高めてゆくしかない。それは、以下に述べてゆく死刑囚やらい病患者や強制収容所の抑留者の場合に当てはまるであろう。

たとえば、独居房で過ごす死刑囚は、内なる砂漠を生き続けることで、そこに一種の超越意識が養

われよう。彼は、われわれが日常世界で人を見ている眼をもうひとつ深くえぐったような眼で人を見ている。今という一瞬を大切に、おそらく普通の人が経験するものの数倍の濃密さで生きている。ここでは時間の質が問われてくる。

加賀乙彦の『ある死刑囚との対話』は、処刑される前日までの死刑囚との2年4ヶ月に及ぶ往復書簡によって構成されている。それは、精神科医・作家と独居房の死刑囚との深いところでの心の交流を伝えている。迫り来る死の恐怖に耐えられず、拘禁ノイローゼに陥っている囚人が多い中で、この死刑囚は大変な読書と思索と創作を実践している。「死刑が最高裁判所で確定する半年前に『サハラの水』を、そして確定後3日目に『黙想ノート』を、そしてその後今日に至る5年間に日記を含めて約800枚の作品を書く」(114)。また、刑場に呼び出しが来る一時間前まで母や恋する女性に宛てて手紙を書き続けている。死刑になったのは40歳7ヶ月。精神科医・作家もほぼ同年齢であった。

この死刑囚は、いかにして驚くべき生産性を達成しえたのであろうか。彼は、「日々第一義のことに眼を注いでいたい」(8)と言う。また、「私たちがこの世にあるということは、私たち一人ひとりには与えられた世界を深く、意味深く生きることだ」(41)と。

死刑囚の身であるからこそいろいろ身につまされて多くの作品を読み、それを深く味わい、また、深い思索を表現しえるのではないか。

比較してみると、われわれの日常生活にはあまりに雑多なものが群がっており、それはかえってわれわれに本質的なものを見失わせ、われわれの動きを鈍くさせているのではないか。われわれは、さらなる自己管理や時間管理が必要であろう。繰り返しのない生を充実させ、独自のミッションを果たすために。目的や方向性を知覚して人生を営み、共同体を築き、人生の虚無より自らを解放するために。

いっぽう、『魔の山』の主人公ハンス・カストロブは、国際サナトリウム「ベルクホーフ」に療養中の従兄弟を訪ねてゆくが、彼自身もそこで療養生活を送ることになる。そこでは、下界とは異なる時間感覚が生じてくる。「この永遠の、無限の単調の中」、「一日が他のすべての日と同じであるとしたら、千日も一日のごとく感じられるであろう」(221)。「大きな時間量、途方もなく大きな時間量が問題になる場合には、空虚や単調はかえって時間を短縮させ、無に等しいもののように消失させてしまう」(221)。独特に希薄で乏しい生活条件の支配する高い場所で、時間感覚を新鮮なものにし、時間に区切りをつけるような出来事も起こらない。「それは、時間のない生活、心配も希望もない生活、停滞していながら、うわべだけは活発に見える放縱な生活、死んだ生活であった」(600)。牢獄でもなければ、シベリアの鉱山でもないサナトリウムで、収容所と似た時間が流れている。ここで療養者の群像が描かれ、思想の葛藤がドラマを展開するが、やがて、主人公は魔の山より降りて、第一次大戦の渦に巻き込まれてゆく。

次に、『イワン・デニソビッチの一日』において、帝政ロシア時代のシベリア送りは、スターリンの時代に復活した。しばしば人々は無実の罪を着せられ、きわめて粗雑な裁判手続きを経て、精神的にも肉体的にも残酷きわまる極限状況に投げ込まれた。零下40度にもなる気候の中で、朝の5時に起床、夜明けから日没まで11時間もの労働、薄いスープやヒエの雑炊や黒パンの食事。「日が暮れて

から、収容所の門をくぐるときほど、囚人が寒さに震え、腹を減らしているときはない。こんな場合、唇が焼けるほど熱い、実の入っていないスープは、自由よりも貴重であり、過去のあらゆる生活よりも、いかなる未来の生活よりも貴重なのだった」(163)。刑期は、1949年以降、誰もが見境なしに25年を宣告される。囚人の一日は長く、刑期は少しも縮まっていない感じがする。しかし、主人公にはなんとしてでも生き残ってやるのだというしたたかさが感じられる。「一日が過ぎ去った。どこといって陰気なところのない、ほとんど幸せな一日が」(218)。これは極限状況を生き延びる一種のユーモアである。これは、やはりロシアの抑留生活をくぐった石原吉郎の言葉とも響き合う。「ユーモアとは、のびきならない状態の中で始めて明らかになるものである。このユーモアの意味が本当に分かったとき、私たちは、この暗い重圧の中で『それでも生きているほうがいい』と、安堵してつぶやくことができるのだ」(『望郷と海』)。

しかし、ひとたび生きがいを失ったら、人はどんな風にしてまた新しい生きがいを見出すのだろうか、と『生きがいについて』の著者は問う。この書物で語られるらい病患者の破局的な様相は、死刑囚の場合やナチスの強制収容所に入れられた場合に近いものがある。したがって、そこにはフランクルの場合と似た対応が窺えよう。「人が自己に対してどのような態度を取るかにより、その後の生き方に大きな開きが生じることであろう」(124)と。態度がここでも重視されている。また、フランクルは「死の床より自分の人生を振り返る」(186)態度を述べているが、ここでは「逆光線で人生を眺める」(96)と言う。すると、らい療養所の生活は、かえって生きる味に尊厳さがあり、人間の本質に近づきうることが分かり、「自分も他人も大きな力に生かされている」(251)と、大きな生命を思う。「小我を捨てて大我に生きる……これはより高い次元での自力と他力の統合であると言える」(248-9)。「人類のためにより幸福な未来を願う心、そのために自分の生を役立てたいと祈る心が、多くの人の生と死を支えてきた」(190-91)。

意味の探求にこそ生涯をささげようと欲し、「自己の存在目標をはっきりと自覚し、自分の生きている必要を確信し、その目標に向かって全力を注ぐ」(38)。生きるために必要な心の張りがここには存在している。「人は自分が何かに向かって前進していると感じられるときにのみ、その努力や苦しみをも目標への道のりとして、生命の発展の感じとして受け止める」(27)のである。そのためには「なるべく自分でなければできない仕事を選ぶのがよい」(32)と著者は言う。

その点、『生きることの意味を求めて』において、著者は極限状況において彼女にしかできない仕事を選んだと言えよう。

オランダ中から集められたユダヤ人を強制収容所へと送る最終中継地、泥まみれのヒースの野を鉄条網で囲ったウェステルボルク収容所、ここへ自ら志願して赴いたエティ・ヒレスムは、過酷な運命を強いられた人々に献身的な愛を注ぎ、稀有な魂の記録を残した。彼女は、1914年にオランダに生まれ、アムステルダム大学で、法学(博士)、心理学などを学び、後にナチス支配化のユダヤ人評議会の職員となってウェステルボルクで働き、1943年、アウシュヴィッツで亡くなっている。彼女の父は優れた古典学者であり、弟のミツシャは天才的なピアニストであり、別の弟ヤープは17歳で新しいビタミンを発見した医師であった。しかし、母を含めた彼ら家族も皆ホロコーストの犠牲となっ

た。

「生きる」ということに関して彼女は言う。「どんな状況の元でも、人生から建設的なことを描き出せる」(34)。「ベッドの中でさえ、人は自分の人生を生きることにはできる」(75)。「人生において事実、本当の意味で重要なのではなく、事実を通して人がどういう人間になったかだけが、重要なのだ」(30-1)。ウェステルボルクで「究極的な人間の価値が試されているのだ」(70)。彼女は、収容所の独特の雰囲気の中で「自分自身の世界」を持っていたのだ。

最後に、フランクルの『死と愛』は、ここでも人の態度、ユーモアなどを論じているが、その中で以下の言葉が注目されよう。「人間の存在は足を失うことによって意味や内容をすべて失うならば、極めて貧しいといわねばならない」(276)。

フランクルの言葉は、難病と闘いながら生産性を挙げた以下の3氏の態度と重ねた場合、その重みがいっそう深く感じ取られるであろう。

中学校の教師であった星野富弘は、鉄棒より落下した事故によって全身の機能を奪われたが、それでも病床でまだ動く口に絵筆をくわえて絵や文字をしたため続けた。試行錯誤の末に創作された『風の旅』や『鈴の鳴る道』などには、読者に生きる勇気を与えてくれる植物画や味わい深い文章が含まれている。

多田富雄は、高名な免疫学者として、高い峰を飛び回る人生を送っていたが、ある日、発作に倒れ、左手を除いて身体の諸機能や言語能力を損なわれた。地獄への落下による打撃を克服するだけでも多大の精神力を要したであろうが、さらに、残された左手でパソコン操作を学び、『寡黙なる巨人』『私のリハビリ闘争』など数冊の著書をまとめたのである。

三浦綾子は、『氷点』など多くの作品で有名な作家であるが、その『難病日記』に表わされているように、夫の助けを得ながら、口述筆記によって、最後まで作家業を全うした。神のご意思を問い、生かされてある日々感謝し、他者を気遣う姿勢は一貫しており、ほのぼのとした読後感を与えてくれる。

上記の3氏の例は、中野孝次の『いのちの作法』にも見られるように、病を得て死を強く意識することによって、濃密な生を営むことに成功している。絶望的な状況においてさえ、それに対して取った態度によって、生きる目的や意味が明確にされ、生産性を挙げているのである。

結論

フランクルの著作やその関連文献を通して浮かび上がることとして、内面の豊かさが存続を導き、極限状況を経た者の時間の質が変化し、逆境に対する人の態度がいかに違いを生ずるか、を確認しておきたい。

精神的なよりどころこそ収容所の抑留者、死刑囚、サナトリウムやらい療養所の患者が極めて必要としたものである。そこでは各人が果たすべき仕事が、精神の緊張をもたらし、存続へと導くのである。「人々が任務を課するサーカスの訓練された動物は、動物園で何もしない同類の動物に比して平均的により長い寿命を有している」(『死と愛』140)という。緊張は、精神の健康の前提条件である。

教育の目的も各自がその独特の生きる意味を見出すよう手助けをすることである。教師は、自らが学問の意義を探求する手本を示すことによって、学生たちを指導することができよう。

引用・参考文献

- 石原吉郎『望郷と海』筑摩書房、1972。
カウフマン、マイケル・T. 金子宣子訳『ソロス』ダイヤモンド社、2004。
加賀乙彦『ある死刑囚との対話』弘文堂、1990。
神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房、1980。
多田富雄『免疫の意味論』青土社、1993。
——『生命の意味論』新潮社、1997。
——『わたしのリハビリ闘争』青土社、2007。
——『寡黙なる巨人』集英社、2010。
中野孝次『良寛に学ぶ「無い」のゆたかさ』小学館文庫、2000。
——『いのちの作法』青春出版社、2012。
ヒレスム、エティ. 大社淑子訳『生きることの意味を求めて』晶文社、1989。
フランクル、ヴィクトール. 霜山徳爾訳『死と愛』みすず書房、1957。
——. 霜山徳爾訳『夜と霧』みすず書房、1961。
——. 山田邦男、松田美佳訳『それでも人生にイエスと言う』春秋社、1993。
星野富弘『風の旅』立風書房、1982。
——『鈴の鳴る道』偕成社、1986。
マン、トーマス. 高橋義孝訳『魔の山』新潮文庫、1969。
三浦綾子『難病日記』主婦の友社、1995。
Bellow, Saul. *Mr. Sammler's Planet*. New York: The Viking Press, 1970.
Drucker, Peter F. *Managing for Results*. New York: Harper, 1964.
——. *Managing the Non-Profit Organization*. New York: Harper, 1990.
——. *Management*. Revised Edition. New York: Collins Business, 2008.
Frankl, Viktor. *Man's Search for Meaning*. New York: Pocket Books, 1959.
——. *The Will to Meaning*. New York: A Meridian Book, 1969.
Holy Bible. New King James Version. Nashville: Thomas Nelson, 1892.
Lipman, Steve. *Laughter In Hell — The Use of Humor during the Holocaust*. New Jersey: Jason Aronson, 1991.
Malamud, Bernard. *The Fixer*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1966.
Singer, Isaac Bashevis. *Meshugah*. New York: A Plume Book, 1994.
Wiesel, Eli. *The Forgotten*. New York: Schocken Books, 1992.

本稿は、2013年3月25日、日本ソール・ペロー協会東京支部例会（於青山学院大学）での研究発表「ヴィクトール・フランクルの時間・存続・態度」を基にして、加筆修正したものである。